

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第1回フォーラム研究会
議事録

日時：平成26年4月22日（火） 10：00～12：00

場所：パブリック・アウトリーチ本部事務所

出席者：12名（順不同・敬称略）

木村（PONPO）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、
大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、久保（PONPO）、
渋谷（元気ネット）、竹中（PONPO）、中岡（元気ネット）、丸山（PONPO）

配布資料

F1-0. 議事次第

F1-1. 業務計画書（平成26年度：一部抜粋）

F1-2. フォーラム参加者状況

F1-3. 平成25年度成果報告書（一部抜粋）

議題

1. 今年度の事業について
2. フォーラム関係の今後の予定確認と日程調整
3. フォーラム参加者の現状
4. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

1. 今年度の事業について（配布資料 F1-1）

木村氏より、資料 F1-1 に基づき、今年度の事業計画の説明がなされた。また、昨年度と異なり、今年度はフォーラム終了直後ではなく、年度末頃（12 月～3 月）にシンポジウムを開く予定であることが説明された。

2. フォーラム関係の今後の予定確認と日程調整

木村氏より、今年度のフォーラムに関連する日程が紹介された。それに伴い、今後のフォーラム研究会の日程が調整された。紹介された事項、および、決定された今後の日程は以下の通り。

- ・ フォーラム（以下、F とする）開催日は 5 月 31 日、6 月 14 日、6 月 28 日、7 月 12 日、7 月 26 日。13 時開始だが、運営は 11 時に集合する。
- ・ 第 1 回 F の前に、第 2 回フォーラム研究会（システム要件の検討とそれに基づく第 1 回 F の設計）、第 3 回フォーラム研究会（模擬フォーラムの実施）を開催する。
 - 第 2 回フォーラム研究会は 5 月 7 日に開催する。
 - 第 3 回フォーラム研究会は 5 月 19 日、21 日、20 日のいずれかに開催する。
NHK の取材が行なわれる予定である。
- ・ フォーラム各回の間にはフォーラム研究会を開き、前回の反省および次回の設計を行う。
 - 第 4 回フォーラム研究会（第 1 回 F の反省と第 2 回 F の設計）：6 月 10 日
 - 第 5 回フォーラム研究会（第 2 回 F の反省と第 3 回 F の設計）：6 月 24 日
 - 第 6 回フォーラム研究会（第 3 回 F の反省と第 4 回 F の設計）：7 月 8 日
 - 第 7 回フォーラム研究会（第 4 回 F の反省と第 5 回 F の設計）：7 月 21 日
 - 第 8 回フォーラム研究会（第 5 回 F の反省）：8 月 5 日
- ・ 第 5 回 F 終了後、フォーラム参加者に対するインタビューを実施する。（8 月末に終了予定）
- ・ シンポジウムは、1 月～3 月の土曜日に開催予定（場合によっては 12 月もありうる）。日程は早めに決定する。フォーラムだけでなく、研究全体について発表する
- ・ フォーラム参加者に対するインタビューの終了後、および、シンポジウム直前に、それぞれ 1 回程度フォーラム研究会を開催する予定である。
- ・ 今年度の業務推進全体会合は 5 回の予定。第 1 回業務推進全体会合は 5 月 2 日に開催される。

3. フォーラム参加者の現状（配布資料 F1-2）

木村氏より、資料 F1-2 に基づき、フォーラム参加者の決定状況が紹介された。不足している属性が確認され、今後も募集を継続することが決定された。

第 1 回 F の 2 週間前（5 月 20 日前後）を目処に、参加者に案内と事前調査票を郵送する予定である。それまでには参加者を決定することが確認された。

第 1 期フォーラムは、首都圏住民参加者 10 名、原子力学会員参加者 10 名でフォーラムを構成した。基本的に 3 グループに分かれてグループワークを実施したが、首都圏住民参加者 4 名、原子力学会員参加者 3 名、もしくはその逆の人数比率となることが多く見られた。第 2 期フォーラムでは、グループワーク時の対等感をより強化するために、首都圏住民参加者 9 名、原子力学会員参加者 9 名でフォーラムを構成することとした。（3 グループに分かれた際、1 グループが首都圏住民参加者 3 名、原子力学会員参加者 3 名と同人数になる）

4. その他（配布資料 F1-3）

木村氏から、第 1 期フォーラム参加者 1 名から、第 2 期フォーラムの運営に関わりたいとの申し出があったことが紹介された。第 2 期フォーラムにおいて、事務局等の役割を担っていただくことにした。また、可能であればフォーラム研究会にも参加していただくことにした。

木村氏から、資料 F1-3 に基づき、フォーラムのシステム化について、成果報告書にどのように整理したか（≒第 2 期フォーラムで検討すべきポイント）が紹介された。その後、活発な議論がなされた。

- ・ 「コミュニケーションがとれるようになるまでのプロセス」を最初から参加者に伝えるべきではないか（その検証が第 2 期フォーラムの目的）。それによって、参加者自身が自分の変容を分類することができるのではないかな。
 - ただし、「変容しなければならぬ」という雰囲気にならないように注意が必要。
- ・ フォーラムの目的とゴールを毎回伝える必要があるだろう。口頭で伝えるだけでは不十分だ（各自が都合のいいように解釈するおそれがある）。ポスターのように毎回掲示しておき、いつでも確認できるようにすべきだ。
- ・ フォーラムというシステムによって、「コミュニケーションがとれるようになるまでのプロセス（フォーラムが目的を達成するための要件）」をどこまで達成できると考えているのか。
 - 第 1 期フォーラムでは、このようなプロセスが必要なのではないかと、いうことを導くことができた。第 2 期フォーラムでは、どこまでが達成可能で、どこに限界があるのかを探っていきたい。

→プロセス3（異なることの許容）がなされることも大きな成果なのではないか。

→プロセス4（相手が変わろうとしていることの認識）、プロセス5（自分が変わろうとする気持ち）は（野心的な）到達目標であるが、プロセス1～3を無視し、プロセス4、5のみを目指しては、達成不可能であろう。

- プロセス4、5は、この順序で達成されると考えているのか。
→同時並行で進むと考えているが、分析の都合上、4、5という順番にした。（ただ、プロセス4のほうが達成容易、かつ、相手が変わろうとしていることを認識すると、自分が変わることが容易になる、という側面はあるだろう）
- 第1期フォーラムでは、変わろうとしていた参加者はいたのかもしれないが、それを明確に態度に表している人は少なかった。第2期では、「変わった」ことを意思表示できる場を設けるべきではないか。
- （特に原子力学会員参加者の）微妙な変化をしっかりと聞きだせるように、インタビューを設計すべきではないか。
- 「コミュニケーションがとれるようになるまでのプロセス」は、「原子カムラ」に限らず、あらゆる分野で応用可能である。（最終報告においては）その点も明言すべきだ。

以上